

## 異端者の生涯と思想

— アンティオケイアのセウエロスの場合 —

ポーリーン・アレン  
中西恭子訳

### セウエロスの生涯<sup>(1)</sup>

総司教就任以前

セウエロスは四五六年ごろ、ピシディアのソゾポリスの裕福な異教徒の家庭に生まれた。四八五年、彼は文法学と修辞学に加えてラテン語とギリシア語を学ぶために、二人の兄とともにアレクサンドリアに移住し、後に彼の伝記を著すことになるザカリヤと出会った。ザカリヤは、セウエロスはまだ駆け出しのころに悪霊と偶像を礼拝し魔術の行使をほしいままにしていた、<sup>(3)</sup>という非難に抗してセウエロ

スを弁護しようとして試みて伝記を著したのであった。そのため、『セウエロス伝』には二人がともに法律を学んでいたアレクサンドリアとベリュトスで実践されていた異教や魔術についても言及がある。ザカリヤは『セウエロス伝』のなかに、教会と国家に仕える栄達の道を着実に歩む複数の若い富裕な男子キリスト教徒の名前を故意に記さなかったが、その目的が、セウエロスが異教と魔術にはかわりをもたなかったというザカリヤ自身の主張に信憑性を与えるためでもあったことには疑いの余地はない。<sup>(4)</sup>

ザカリヤの指導のもと、セウエロスは聖書のほか、カイ

サレイアのバシレイオスならびにナジアンゾスのグレゴリオスの著作を研究した。その後、彼はトリポリスにある殉教者レオンティオス教会で洗礼を受ける前に、ある修道士から正式に要理を学んだ。<sup>(5)</sup>レオンティオスは神靈崇拜からキリスト教へ異教徒を回心させる靈験で定評のある殉教者であつたから、セウエロスの選択は確かに偶然ではないのだが、ザカリアは伝記のなかで、セウエロスの選択の動機そのものを粉飾している。セウエロス自身も、ダブネのレオンティオス教会で五一三年に講じた第二七講話で、受洗前には異教を奉じていたが、あるとき突然に両親の信仰から転向して、キリスト教を信じるようになったと主張している。<sup>(7)</sup>議論の余地もなく明白な反カルケドン主義に依拠する洗礼を受けた後、セウエロスは禁欲行者になり、反カルケドン主義者の第一世代として名高いイベリアのペトロスの幾人かの弟子たちに会ってたちまち彼らを自らの仲間として、四九〇年ごろにはガザ近くにあつたペトロスの修道院で修道士となつた。<sup>(8)</sup>このようにして彼は、かつての友であり指導者であつたザカリアと袂を分かち、ザカリアはコンスタンティノポリスへ行って弁護士となつた。<sup>(9)</sup>

ペトロスの修道院を出たセウエロスは、エレウテロポリ

スの砂漠で独居生活を行う、という一段高い修行の段階に入ったが、熱烈に禁欲修行を行ったために健康を著しく害し、ロマノスの修道院長に引き渡されて、健康を回復するべく治療を受けた。<sup>(10)</sup>五〇〇年にセウエロスは、パンプリアのマギュドンの司教であつたエピファニオスによつて司祭に叙階された。<sup>(11)</sup>それからほどなく、セウエロスは神学者でもあつたアレクサンドリアの修道士ネファリオスと初めて出会う。このネファリオスは反カルケドン派からの転向者であつた。

ネファリオスの攻撃に未来の総司教セウエロスが応じてきたため、ネファリオスはエルサレムの「教会の前で」演説を行い、<sup>(12)</sup>教職者たちと修道士たちの支援を得て五〇八年にこの地でセウエロスを追放することに成功した。この事件は、偉大な大修道院長サバスが精力的に宣伝活動を行った結果、この地域で反カルケドン論争が沈静化したことの証明である。<sup>(13)</sup>この事件を皇帝アナスタシウスに上奏し、また嘆願を行うために、セウエロスは二〇〇名の修道士を伴つてコンスタンティノポリスへ赴いた。<sup>(14)</sup>このときネファリオスとその側近のカルケドン派の修道士たちも、パレスティナから彼らの後を追つた。<sup>(15)</sup>二人の修道士は帝国の首都で公

衆の面前で激論することになったが、ほどなくセウエロスは皇帝の信頼を得て、すぐにその靈的指導者として宮廷に勤務することになった。

この事件の直前に、反カルケドン派のマップク司教であったクセナイアス、フィロクセノスがコンスタンティノポリスの皇帝のもとに召喚された。反カルケドン派の教会會議に参加するように、という命令であったのであろう。<sup>(16)</sup>

アナスタシウス帝が反カルケドン論争に共感を示す一方、首都の総司教マケドニオスは、人口の大部分をカルケドン派が占めるこの都市にあって、やはり厳格なカルケドン派の立場に依拠しており、フィロクセノスと交わりを保つことを拒否した。<sup>(17)</sup> セウエロスが到着した五〇八年までにフィロクセノスはコンスタンティノポリスを去っているが、年齢や背景こそ異なれ、<sup>(18)</sup> この二人は、受肉の神学の歴史における転換点として記録されてきた協力関係を築き上げたのである。<sup>(19)</sup>

セウエロスもフィロクセノスも、明々白々たるカルケドン主義者たちから糾弾されればされるほど、むしろ本望であったであろう。支配圏のなかでの混乱を最小限にとどめようとする意図が介在していたにはせよ、アナスタシウス

帝もまた、『ヘノティコン』あるいは先帝ゼノンが採用した統一の手段を宗教政策の主たる措置として採用することを確約していた。セウエロスもフィロクセノスも確かに、

この通達を決然と拒絶することはなかったであろう。コンスタンティノポリス、アンティオケイア、エルサレムの総司教座を率いていたのは忠実なカルケドン主義者であった。フィロクセノスの眼中にはアンティオケイア総司教フラウイアノスが、また、おそらくエルサレムの総司教エリアスもが厳然と存在した。<sup>(20)</sup> セウエロスとフィロクセノスの強固な意志を前にした皇帝アナスタシウスは、自身の目的を達するためには『ヘノティコン』は有用ではないことがますます明らかになるにつれて、はた目にも明らかにセウエロスに信頼を置くようになり、『ヘノティコン』に反カルケドン主義的な解釈を施す『テュボス』として知られる文書を起草する任務を与えた。

フィロクセノスが加わったアンティオケイアのフラウイアノスへの反対運動は、五〇九年にアンティオケイアで開催されたシリア地方教会会議で逆風にさらされ、マップク司教と修道院側の支援者たちは、ごくわずかな人数の少数派に甘んじることを余儀なくされた。<sup>(21)</sup> ラオディケイアで

行われたこの地方教会会議にはおそらく、ほどなく行われる予定であったセウエロスの叙任式にも出席するはずのフィロクセノスの支持者たちも出席していたと考えられる。<sup>(22)</sup> フラウィアノスはここで、捏造された弾劾の標的になり、強いられて総司教の座を辞任し、現在はヨルダン領となっているペトラに追放された。<sup>(23)</sup> フィロクセノス一派には彼らの選択を代表する総司教候補、すなわち修道士セウエロスを擁立する道が開かれた(五一二年一月)。

帝都でセウエロスが、またシリアでフィロクセノスが煽動を行った結果、ほどなく新カルケドン主義として知られる新たなキリスト論が具体的な姿をもって出現した。以前にセウエロスを苦しめたネファリオスは、その初期の代表的な論客であった。五〇八年ごろネファリオスは『カルケドン公会議のための弁明』(CPG 6825)を著し、キリストの本性にかんする議論に、言語論上でも定義論上でも、決定的な転回をもたらした。<sup>(25)</sup> セウエロスからネファリオスに宛てた二つの請願書は不幸にして完全な形では残存していないが、セウエロス自身がパレスティナにあって書いたものであることが明らかになっており、<sup>(26)</sup> ここからネファリオスが奉ずることとなった新カルケドン主義的見地の概要

を再構築することができる。二種類の有力な単性論的キリスト論の雌雄を決定する際に—カルケドン主義側には同様の競合はみられない—両性論者は和解というべき態度を強いられたにも等しかった。つまり、新カルケドン主義的な思潮の特徴とは、論争の火種となった二つの定式、すなわち「二つの本性から」と「二つの本性へ」という表現を和解させる試みであり、セウエロスとその一党が正統性の試金石とみなしたアレクサンドリアのキュリオスの主張がカルケドン派の主張に合致することを示す試みでもあったのである。「二つの本性」という表現を用いる教父たちも存在した、という主張がネファリオスの議論には明らかに観察できる。われわれが百歩譲ってその事実を認めたとしても、セウエロスの反論によれば、ネファリオスがいうような意味では教父たちはその表現を用いてはおらず、ともかくもキュリオスはネストリオスの威嚇に直面してそのような表現を退けたにすぎない、ということになる。<sup>(26)</sup> 『ネファリオスに与う』の第二部でセウエロスはネファリオスと「キリストは合一(受肉)の後に二つの本性において理解されるべきであると主張する、まさにそのような人々」に呼びかけて、「彼らの考える二つの本性は合一したもので



あり、分割されることはないものである」と付け加える。<sup>(29)</sup>

ここでセウエロスは、キュリオスの主張である「合一の後にはそれぞれの本性が分かれるままにしておくがよい」という見解を繰り返し用いている。この見解はキュリオスの五巻からなる『ネストリオス駁論』から引用したものであるが、セウエロスはそれに加えて「異端的な」アンティオケイアの神学者たちの著作を引用し、単性論と両性論的キリスト論の酷似の例証として用いた。

まさにこの頃、ネストリオスの強敵であるところのキュリオスは以上のような議論に基づいて両性論的なキリスト論の敵として結論されるべきではなく、むしろカルケドン主義に好意的であったと見なすべきである、という見地を証明することを目的とするキュリオスの文言集が各種流布していた。<sup>(30)</sup> コンスタンティノポリスでその一種を入手したセウエロスは、『フィラレテース』、すなわち『真理の友』という題名を付した著作を著して、キュリオスの意図を明確に示すことで、両性論者としてのキュリオス像を描く論敵に反駁する、というおのれの使命を自覚した。『フィラレテース』<sup>(31)</sup>は、反カルケドン派が提示したキリスト論の典型である。文言集はその性質からして、意図的に選択され

たテキストで構成されているため、カルケドン主義者がこの偉大なアレクサンドリア人を両性論的キリスト論の支持者に仕立てあげたのだ、ということを明らかにしたいという意図から、セウエロスもまた、自論に合致したキュリオスの文言を選んで引用するという作業を行った。「キュリオスの思想の歴史的発展は事実、単性論と両性論の両陣営に共通の武器庫ともなりえるほどに、両義的な性質をもっている。彼の議論に求めるものによっては、正反対のキリスト論とそこから導き出すことも可能なほどであった」<sup>(32)</sup>し、この二律背反性こそ、セウエロスをしてこのような見地に立たせ、キュリオスのキリスト理解を弁護するために何度も筆を執らせた理由でもあった。『フィラレテース』でセウエロスは、キュリオスが両性論的キリスト論に接近しているという議論を打破し、キュリオスが純粹に単性論を代表する論客であることを示そうと試みた。彼は結局、キリストの両性を喚起するいかなる発想をも排除するために、過去の教父の著作においてそのような表現が用いられている場合を、とりわけそのような表現が混用されている場合を考察し、用語の純化を強く主張することになった。

司教就任以前からすでに、セウエロスは各種の書簡を交

わしていた。それを見る限りでは、彼は三〇年間にわたり自らのよき助け手にも味方にもなる人脈を築きあげていたことがわかる。彼が相当数の司教や世俗の公職者たちと良好な関係を保っていたことは明らかであり、この時期に信徒を名宛人として書かれた書簡からは、司教在任時と追放時にわたる時期に書かれた書簡にも見られる司牧者としての鋭い感覚をセウエロスが備えていたことを証明する。

### 総司教在任時（五一二—一八年）

セウエロスは選出された総司教選挙は、おそらく五一二年一月六日に行われた。<sup>(33)</sup> つづいて一月一六日に大教会の献堂式が行われ、フィロクセノスを含む一二名の司教が司式補佐を行った。<sup>(34)</sup> この式典のなかでセウエロスはいわゆる司教座聖堂講話、つまり彼が司教職にあつてカテドラすなわち司教座から行った一二五の講話の、その冒頭を飾る講話を行った。この講話はシリア語断片と、完全な形で残存するコプト語版で伝承されている。<sup>(35)</sup> この講話からは、アンテイオケイア郊外ダブネの殉教者ロマノスの聖地での喧騒と歓声に遮られて、一月一六日にはこの講話を聞くこ

とのできなかった者が多かったため、二日後に再び講じられたことがわかる。また、これまで信じられてきたように、アンテイオケイアの住民すべてがシリアの習慣にしたがつて、歓呼をもってセウエロスの司教への就任を喜んで迎えた、というわけではなかったこともわかる。「二つ」という語は統一と合一とを解消し、救済の秩序を破壊する語でもある、という見地から、新しい総司教は、新しいユダヤ人、すなわちカルケドン公会議に参加した聖職者たちや、見えざるものを二つの本性に分割した者たちの狂気を糾弾した。<sup>(36)</sup> 司教叙任式の掉尾で、セウエロスは信仰宣言に署名し、一三名の司教が証人となった。

マケドニオスとフラウイアノスが罷免されて『ヘノティコン』の有効性が破綻し、カルケドン派の司教や聖職者、修道士たちが追放されてゆくそのあいだにも、新しい職務に就いたセウエロスには、あいにく試験が待ち受けていた。フィロクセノスとその一党の修道士たちの影響力あつてこそ、ローマ帝国とペルシアの境界の辺境で反カルケドン派はようやく忠実に支持された。あらかじめ退位を表明していたアナスタシウス帝がセウエロスが司教に就任したその翌日に退位したことからも明らかであるが、コンスタンティ

ノポリス内外は問題山積の情勢であった。パレスティナとエルサレムでは、カルケドン派の修道士と聖職者のなかからセウエロスの司教叙階式に対する抗議が声高に唱えられた。エウアギリオスの証言によって現在に伝わる口承によれば、アパメイアやエピファネイアのようなギリシア文化の影響が強いシリヤ・セクンダの都市でもやはり抗議が起こったという<sup>(38)</sup>。穏健なカルケドン派、あるいは新カルケドン派の派閥のなかで、懐柔役を務めていた要人のなかから、セウエロスの次なる神学上の論敵となるヨアンネス・グラマティコスがまさに頭角を現した<sup>(39)</sup>。これは、セウエロスとその支持者にとっては、予想外と思われる方角から生じた困難であった。セウエロスがキリキヤで直面したのは、これとはまたまったく位相を異にする問題であった。タルソスのディオドロスやモस्पエステイアのテオドロス、ネストリオスらに代表されるアンティオケイアの神学的伝統はこの地で依然強い影響力を保っていた。タルソスではネストリオスの名が依然として複数のディプティコンに記録されており、くわえてネストリオスその人が殉教者として崇敬されていたのである<sup>(40)</sup>。

このような状況が、地元アンティオケイアの事情に疎い

セウエロスに六年間にわたってのしかかっていた。新しい総司教としての彼はむろん、神学上の助言者として宮廷に勤務した間に身につけた政治的な駆け引きや根回しにも長けており、マイウーマでみずからの修道院を経営していたこともあって、短期間とはいえ、組織運営の経験も積んでいた。とはいっても、彼の立場はまず第一義的には、修道士兼神学者であった。彼はおそらく信徒にむかって直接に教理を説くことには慣れていなかったであろうし、アンティオケイアの住民のなかでは余所者にすぎなかった<sup>(41)</sup>。

総司教としてのセウエロスの最初の公務は『シユノディカ(教会会議議決書)』の公布か、あるいは司教たちに新総司教の信仰告白と破門宣告対象の目録を含む書簡を送付することであった、と考えられる。この書簡の名宛人たちは、司教との交わりへの参入を承認する場合には、追って自らの信仰告白と破門宣告対象の目録を返書とした。セウエロスは、エジプト教会との交わりを再度樹立するために、アレクサンドリアのヨアンネスに書簡を送り、コンスタンティノポリスのティモテオスにも、穏健なカルケドン派で『ヘノティコン』に依拠してはいても、セウエロスの破門宣告対象者目録に記載されていることが明らかであるにも

かわららず、書簡を送った。<sup>(44)</sup> 罷免されたフラウイアノスの兄弟であるテウロスのエビファニオスは、『シュノディカ』の受諾を拒否した。<sup>(45)</sup> おそらくほかのカルケドン主義者たちも同様の態度を示したのであろう。これらの書簡の抜粋はアラビア語訳のみで残存している。

セウエロスは就任した総司教の常として、アンティオケイアとその周辺のディプティコンからの異端の司教たちの氏名の削除を命じたが、<sup>(46)</sup> フィロクセノスの場合と同様にすべてのカルケドン主義者の氏名の削除を主張することがないように検討を重ねた。<sup>(47)</sup> カルケドン派の論敵たちの命運は暗転してゆく。フィロクセノスとセウエロスが照準を定めていた総司教三頭体制の最後の一人であるエルサレムのエリアスが罷免されてからは（五一六年九月一日）、ますます反カルケドン派の立場は危うくなった。アレクサンドリアにおける第一世代の反カルケドン主義者たちの氏名、すなわちディオスコロスと「<sup>フィロ</sup>猫」<sup>テウス</sup>のティモテオスの氏名はディプティコンに残された。<sup>(48)</sup>

セウエロスは、ディプティコンに記載された聖職者の氏名の保持あるいは削除に対する責任は自らにある、と考えていた。<sup>(49)</sup> 司教座の場合にも属司教の教会の場合にも同様

であった。<sup>(50)</sup> 司教叙階の決定に際しては、彼は選出の過程で主導権を握るといふ私的な方法でかわった。<sup>(51)</sup> 司教候補者の選択において生じた問題があるとすれば、司教候補者の選択を皇帝に上奏したセウエロスが一連の手続きを行う際に、首都における自らの下僚 (apocrisarii) を用いたこと

であろう。地域の司教が「異端」に陥ったために叙階の際に司教の立ち会いが必要となる場合ではない限り、ある司教が自らの司教区の外で叙階を行うことを禁ずることも、セウエロスには可能であった。<sup>(52)</sup> 書簡を見る限りでは、アンティオケイアでは教会裁判の審理が行われるとき、多数の司教たちがさまざまな場面でセウエロスの補佐として立ち会うことが常であったようである。<sup>(53)</sup> しかし、司教の立ち会いにかんして、書簡にみられる証言は、司教臨席法廷 (audientia episcopalis) の前に世俗の審理が行われる場合というよりもむしろ、教会法廷の場合にかんするものである。長老であったタルソスのユリアノスが教会財産を着服したかどで告発されたとき、セウエロスは確かにこの件を帝国東部管轄軍事長官 (magister militum per Orientem) に報告したが、<sup>(54)</sup> すくなくとも教会法廷の前に行われた数例の審理についていえば、セウエロスは個人的に関

与したにすぎない。<sup>(55)</sup>

セウエロスは時間と精力とを費やして、自身が責任を負う立場にある人々がカルケドン主義者、とりわけ反カルケドン派への参入を希望するカルケドン派の聖職者に接するときに確実に「正しい」態度を保つように働きかけた。教理にかんする議論の際に言及される「正しさ」に加えて、教憲法規にかかわる問題を論じる際にもこのような「正しい」(akribeia)に言及する論法は、セウエロスの議論の特質である。ティモテオス・アイルーロス(「猫」のティモテオス)、イベリアのペトロロスやフィロクセノスを前にしたセウエロスは、カルケドン主義を放棄した者は再叙階や再洗礼の屈辱を味わわせる対象とするべきではないにしても、みずからの信仰告白を文書化して改悛の意を示すべきである、と確信していた。<sup>(56)</sup> 罷免されたフラウィアノスの追隨者であった人々はこのような処遇を受け、後にはその処遇ゆえにセウエロスを非難する者まで現れた。<sup>(57)</sup> セウエロスには、同様の見解に基づいて極端な宗教的熱狂を排除することに成功した第一世代の反カルケドン主義者、ティモテオス・アイルーロスの行動を例として、自らを弁護することも可能であったであろう。

司教就任以前に書かれた書簡と同様、五二二年から五二八年の間の日付をもつ書簡からは、セウエロスの如意になつた人脈の幅広さが明らかになる。名宛人のなかには大修道院長たちや複数の修道士の集団<sup>(58)</sup>も含まれている。自身が修道士であったことから、またマイウーマにおける自らの修道院経営の経験から、セウエロスは自らの管轄下にある複数の修道院の経営に大きな関心を抱いていたようである。彼の書簡はシリアにおける反カルケドン主義的な修道制の確立の課程で培われた儀典の一端も明らかにする。<sup>(60)</sup>

総司教在任時から続いていたセルギオスという人物との文通は、セウエロスが総司教の座を追われた後も続いた。セルギオスは極端な反カルケドン主義者で、アポリナリオス派の発想に影響を受けていたようである。この文通には、セルギオスからの三通の書簡とセウエロスの三通の返書に加えて、セルギオスの『弁明』が掉尾に含まれる。文通の始まりであるセルギオスの最初の書簡は、五一三年以降のものであると考えられ、文通はセウエロスが追放された五一八年以後まで続いた。<sup>(61)</sup> 総司教セウエロスとその論敵セルギオスの論争は、キリスト論の専門用語にかんするセルギオスの認識の誤りとキリスト論にかんする理解のあり方が

原因で生じたため、ここでのセウエロスの書簡にはほかの二連の書簡集の大半のものに比べて教理論的な色彩が濃い。セルギオスは「キリストの単一性の熱心党」であつたから、セルギオスへのセウエロスの返書は単一性の性質とその構成要素を集中的に論ずるものとなり、彼の考える単一性はらむ救済論的な含意が顕著に強調されていた。セルギオスのなんととはなしに混乱して輪郭のはっきりしない発想に直面したセウエロスにとっては、「適切性」にかんする自説や彼自身の見解をいつものようにキュリオスの思想を根拠として明瞭に論じる義務が生じた。

一二五の現存する講話を根拠として、セウエロスは初代教会のもっとも偉大な説教家の一人として認識された<sup>(63)</sup>。これらの講話が行われた場所と日付は、多くの場合、現代まで伝えられている。アンティオケイアの大教会に限らず、総司教セウエロスは殉教者記念堂や市内のその他の教会でも説教した。新教会(Hom. LXIV)、天使ミカエル教会(Hom. LXXII)、殉教者パピュラス記念堂(Hom. XI)、四〇殉教者記念堂(Hom. XVIII)、レオンティオス教会(Hom. XXVII)、イグナティオス教会(Hom. XXXVII)、バルラン教会(Hom. LXXXIII)、ユリアノス教会(Hom.

LXXV)の各教会である。彼はまたアンティオケイア市の外でも説教を行った。修道院(Hom. XXX)、セラウケイア(Hom. XXVIII)、カルキス(Hom. LVIおよびLVII)、キュロス(Hom. LVIII, LIX, LX)、およびアイギアイ(Hom. CXおよびCXI)である。以上の講話には、発展した形態の殉教者崇敬が看取される。殉教者崇敬は、都市でも周縁の田園地帯でも、異教の魅力に抗して相変わらず供されるべき解毒剤として機能していた。生神女マリアはますます重要な存在となりつつあつた。この状況は、第一四講話と第四七講話の献辞にみえるマリアの名に冠せられた「生神女」の添え名にも反映されている。典礼暦の重要な祝日のほかには、使徒ペテロ、テクラ、エジプトのアントニオス、アタナシオス、さらにはセウエロスにとつての英雄であつたカイサレイアのバシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスの祝日の愛餐会にも説教が行われた。

精力的な経営者であると同時に才ある説教者でもあつたセウエロスは、詩才をアンティオケイア総司教区の典礼聖歌にも傾注した。この動向に関与した人物にペイト・アプトニアのヨアンネスがいるが、五一二―一八年のあいだの彼にかんする伝記的情報は、典礼への関与を除けばほぼ不

明であるといつてよい。アンテイオケイアの住民が世俗曲・教会音楽の別を問わず歌を非常に好んでいる様子をまのあたりにして、セウエロスは聖歌を作ることを決意した。この間、彼は住民に、劇場を去つて教会へ帰れ、と懇願した。ヨアンネスによれば、セウエロスの手になる聖歌は、神学についても、観想の方法についても、正しい教理についても、聖書の奥深さについても、よき働きについても受難についても教えているという。<sup>66</sup> 古アンテイオケイア教会から伝わる三六五篇の聖歌のうち、二九五篇がセウエロスの作に帰せられている。<sup>67</sup> 総司教はまた偉大な典礼学者でもあった。シリア語とコプト語断片で残存する聖餐にかかわる儀典が、ギリシア語やシリア語、コプト語に翻訳された洗礼式の儀典が、「おお、ただひとり生まれ給ひし方」のような現在もギリシア正教会やコプト正教会で歌われている典礼聖歌が彼を介して伝えられた。

セウエロスは依然総司教の座にあつたが、パレスティナやエルサレムのような、大勢において親カルケドン派の地域に影響を及ぼす實力はもはや彼にはなく、以前にはセウエロスの擁護者であつたアナスタシウス帝が、ゴート人ウイタリアヌス（その代父は罷免されたアンテイオケイアのフ

ラウィアノスであつた）とその麾下の蛮族部隊がアンテイオケイア総司教支持に回ろうとしていることを必要以上に懸念していることが、しだいに明らかになってきた。<sup>68</sup> 五一八年四月五日に逝去したコンスタンティノポリス総司教ティモテオスの後任は、カッパドキアの出身でカルケドン公会議で公式に断罪宣告を受けたヨアンネスであつた。ヨアンネスの就任からほどなく、新しい総司教がセウエロスに異端宣告を行ったという噂が広まつた。<sup>69</sup> 今まさに起ころうとしている災難の兆しであつた。老帝アナスタシウスが五一八年七月九日に逝去し、ウイタリアヌスの同僚でラテン語話者であるユスティヌスが帝位に就くと、帝都の群衆はコンスタンティノポリスのみずからの総司教に承認と弥栄の歓呼を行ったが、この帝都の歓呼はアンテイオケイアでも同じように総司教承認の歓呼が行われる確実な兆しとはならなかつた。

アンテイオケイアの群衆はただセウエロスの辞任を要求しただけではなかつた。いまは亡きマケドニオスの遺骸を教会に再び安置した上、カルケドン派の教令をローマに送るようになつた。セウエロスに残された日々は数えるほどとなつた。彼を総司教の座から引きずりおろそうとした



者の筆頭は、何をにおいてもまずウイタリアヌスであった。彼はおのれの代父であるフラウミアノスの受けた侮辱に報いようとしたのである。コンスタンティノポリスに召喚されて裁判に処せられるかあるいは舌を切り落とされることになっていった総司教セウエロスは、どうにかセレウケイア・ビエリア港に到着し、ここから九月二十九日にアレクサンドリア行きの船に乗った。<sup>(70)</sup>五一八年以後、五五名を下らぬ司教たちがアンティオケイア総司教区から追放された。<sup>(71)</sup>

## 亡命

エジプトに到着したセウエロスは総司教ティモテオス四世<sup>(72)</sup>の歓迎を受け、アレクサンドリア郊外のエナトンの修道院に赴いた。<sup>(73)</sup>ここでは罷免されたハリカルナッソス司教ユリアノスもまた保護を受けていたのである。セウエロスは逃亡した後、アンティオケイアの聖職者たちから横領とユダヤ教徒との共謀と魔術行使のことで告発された。

帝都では、ユスティヌス帝が西方の動向に同情を示し、教皇ホルミスタスと東方の諸教会の一致の回復を図ろうと神経を尖らせていた。五一九年三月三十一日の復活祭の日、

皇帝は厳かに、アカキオス主義分派の始動に伴って背信した旧いローマと新しいローマの交わりの回復を宣言した。カルケドン主義の復権と西方教会との緊密な連帯、そして反カルケドン主義者に対する弾圧は、ユスティヌスの治世における宗教政策の顕著な特徴である。<sup>(74)</sup>例外的にエジプトは迫害を免れたとはいえ、セウエロスの描写によれば、エジプトはレオの『トムス』とカルケドン公会議の議決に背いて連帯した。<sup>(75)</sup>広い地域で反カルケドン派の司教たちが強いられて司教座を追放された。たとえばセウエロスのような人物の名が含まれていない、という点では完全な記録とはいえないが、シリア語年代記には五二名の追放された司教たちの氏名が記録されている。<sup>(76)</sup>追放の憂き目にあつた者の多くはどこへ行つても危険がつきまとうにもかかわらず、セウエロスの書簡にもあるようにエジプトに安息の港を求め、コンスタンティノポリスに召喚された際には常に保証されるべき安全な経路を求めた。

セウエロスは二〇年の亡命期間を著作に没頭した。彼にとつては困難かつ危険な時期だったのである。生活に必要な品を届ける者以外は誰も彼の住所を知らなかった。<sup>(78)</sup>彼は常に移動を重ねており、時折は何らかの報告が届いたため



に居所を替えさえもした。<sup>(79)</sup>彼の正体を知る者でさえ、ある公職者たちを介しなければ、彼と接触をはかることができなかつた。<sup>(80)</sup>孤独の身にはあつても、総司教就任以前から彼が培ってきた選りすぐりの人脈を通じて彼は事件を知ることができ、書簡を送れば彼と接触することも可能であつた。この時期の彼の書簡からは、書物が手元にないことが彼にとって深刻な問題であつたことが明らかではあるが、カルケドン公会議とその支持者のみならず、みずからの支持者のうちの過てる者たちにも反論を行う神学的著作を書き続けたという点で、この亡命の時期はきわめて生産的であつた。

セウエロスがエジプトに逃亡を余儀なくされたという事実はあつても、総司教としての任務や反カルケドンの主張の放棄を示唆する証言はみられない。「ユダヤ人」と渾名された彼の後継者パウロスが、反カルケドン主義者の状況を厳しくしても(五一九—二二年)、セウエロスは亡命先からもみずからの総司教区を運営しつづけた。五二一年にはシリアの広い範囲で修道者が修道院から追放される事件が生じた。追放された修道者の多くは砂漠地帯で生き延びたようであるが、セウエロスの肩には遠い亡命の地から

このような集団に助言と激励を行う責務がのしかかつていた。この責務は、亡命期間中にセウエロスが書いた多数の書簡の名宛人になっている二人のヨアンネスという名の大修道院長兼司祭を窓口に行われていたようである。<sup>(82)</sup>この二人は出自こそ定かではないが、シリアの反カルケドン主義教会に対するセウエロスの責任を代行していたようである。パレスティナでは、セウエロスが以前に経営していたガザ近郊のロマノスにある修道院の大修道院長を務めていたと思われるテオドロスという人物がその代理を務めていたようである。<sup>(83)</sup>セウエロスの書簡には、二人のヨアンネスとテオドロスという人物を連名の名宛人にもつ一通がある。<sup>(84)</sup>

セウエロスは総司教の座にあるあいだ、少数ではあるものの確信的に反カルケドン主義を貫く聖職者たちと闘わなければならなかつた。しかし、実際には、離散した反カルケドン主義者たちにとっては、教会法にもとづいて正式に叙任された司祭や司教を指導者として迎えることができる機会はいくつはなかつた。彼は亡命をきっかけにこの現実と直面し、心を痛めながらも切実な問題としてとらえるようになったに相違ない。反カルケドン派に対する弾圧は、「ユダヤ人」パウロスとアンテリオケイア大地震で死んだエウ

フラシオス(五二一—六六年)によっても引き続き行われたが、特にエフレム(五二七—四五年)は問題をいっそう深刻にしたようである。五三〇年ごろ以降、反カルケドン派がカルケドン派に対抗する聖職者と位階とを樹立してはじめて、問題は解決に向かった。

五一年のある時期に、長老であり文法学者でもあったカイサレイアのヨアンネスが『公会議への弁明』を著して(CPG 685f)、ネファリオスの同題の著作にみられる議論よりもはるかに構造的なアプローチをその問題について提示した。ネファリオスと同様、ヨアンネスも新カルケドン主義的な潮流に動かされたのである。キュリロスを議論の根拠に据えたヨアンネスには、セウエロスとその一党をカルケドン公会議の方針と和解させるという目的があった。ヨアンネスの著作は大半が散逸しているが、議論そのものはおおむねセウエロスの反論から再構築することが可能である。『敬虔ならざる文法学者を駁す』という挑発的な題名が冠せられたセウエロスの反論は、完全な形では残存していない。<sup>(86)</sup>この論考は五一九年にセウエロスが罷免されたのちにはじめて発表された。おそらく彼が総司教の職務に忙殺されていたためであろう。セウエロスはある書簡で、

あたかも序論を彼がアンテイオケイア総司教であったころに、<sup>(87)</sup>すなわち帝国の市民であることが法的に認められていたところに書いたように思われかねないような方法で配置したことがかえって執筆の妨げになった、と述懐している。資料が身の回りになかったことも駁論の執筆を困難にした。ネファリオスのようではあるがずっと手慣れた方法で、ヨ

アンネスはキュリロスの「受肉した一つの本性」のキリスト論とカルケドン主義の両性論的なキリスト論の仲介を試みた。彼は用語と概念を定義し、キュリロスの定式とカルケドンの用語法の和解を試みる、という二つの方法を採用した。この方法はどちらもセウエロスを当惑させた。駁論にみられるヨアンネスへの非難は、彼の苛立ちの反映でもある。論敵ヨアンネスの示唆は穏当なものであった。アレクサンドリアの教会とアンテイオケイアの教会との四三三年の合同信条では、「二つの本性」を棄却せずに「唯一の受肉したロゴスの本性」への信仰告白を要求する立場から、カルケドン主義と妥協をはかることが可能であったし、セウエロスが好んで論拠とする四三九年以後のキュリロスによる反ネストリオス主義書簡にも、そのような立場がみられるのではないか、というのである。しかし、そのような示

喉をセウエロスは頑として受け付けなかった。<sup>(88)</sup>

さきに述べたように、極端な反カルケドン主義者セルギオスとのセウエロスの文通は亡命中には終わらなかつた。

反カルケドン主義者の側にも今や、セウエロスゆえに苛立たしい脅威が新たに出現した。以前にはセウエロスの同志であつたが、いまはハリカルナッソスの司教を罷免されたユリアノスである。二人はセウエロスの滞在時にコンスタンティノポリスで面会し、総司教マケドニオスに対抗して協働した。<sup>(89)</sup>五一八年にユリアノスが司教の座から逃亡した後、エジプトのエナトンの修道院で彼らは再会した。ユリアノスの論考は、復活以前からもキリストの身体は腐敗をまぬがれており (aphthartios)、また決して朽ちることがない、という趣旨のものであり、危険なまでにエウテュケスや仮現論者の主張に似通つていように思われるという点では、反カルケドン主義者にとつても、親カルケドン主義者にとつても、意見の一致するところであつた。このような議論が現れたため、反カルケドン主義運動はキリスト不朽論 (アフタルト・ドケティスムス) という論敵によつて知られることとなつた。五二〇年ごろから五二七年まで、この二人の追放された司教は、延々と言葉の限りをつくし

て激しく議論を闘わせた。議論は、セウエロスがユリアノス主義者のゆゆしき影響を打ち消すことに失敗して敗色濃厚となるまで続いた。セウエロスは『フィラレテース』とヨアンネス・グラマティコス駁論で行つたように、ユリアノスへの激烈な反論においても用語を純粹にしようとする目論んだ。キリストを「不朽である」というとき、それは「罪がない」という意味になる。キリストが「腐敗する」のは、飢えや寒さや死のようないわゆる「咎なき受難」に苦しむときであり、復活の後にはじめて絶対的に不朽となる。<sup>(90)</sup>セウエロスはユリアノスの「不朽」(aphtharsia)の教説の再現に失敗した。それでもこのくだりからは、ユリアノスにはキリストの身体の実在性の議論を完全に破壊する意図がなかつたようであり、それどころかキリストを特別な権能を持つ新しいアダムとして描こうとさえしたようである、とわかる。この新しいアダムは人間に科せられた限界の支配を受けてはおらず、自ら望んで苦しみや死のような「受難」を堪え忍ぶ。ユリアノスの支持者たちは、定義を規定するさいにそれほど周到な注意を払わなかつたので、キリスト不朽論の勃興に対するセウエロスの警告には十分な根拠があつたことが証明された。

みずからの伯父と数ヶ月間の共治を行った後、ユステイニアヌスは五二七年に帝位に就いた。彼は正統な信仰の確立に加えて、カルケドン派と反カルケドン派の一致の確立を目的とする宗教政策を展開し、後者の達成にはセウエロスの支援が不可欠であると悟った。ユステイニアヌスは漸進的に反カルケドン派への弾圧を弱め、五三一年には追放された修道士たちを召還した。<sup>(91)</sup>翌年には、コンスタンティノポリスでの六名のカルケドン派司教との教会一致のための会談を実現させるため、砂漠に住む六名の反カルケドン派司教に帝都への安全な旅行を認可した。このとき、セウエロスも招かれたが、高齢を理由に出席を辞退した。帝室からの招待を辞退するために、長文の書簡をユステイニアヌスに宛ててしたためたセウエルスは、アレクサンドリアで膨大な額の資金を供出して反乱を惹起した、という告発に抗して自己を弁護したうえ、ユリアノスとその教説を攻撃した。<sup>(92)</sup>五三二年の一連の「会談」は一致した結論には達しなかったが、それぞれの論題については詳細な議事録が残存している。<sup>(93)</sup>ユステイニアヌスは会談の一つを主催し、翌年に公布した勅令をその返答とした(『ユステイニアヌス法典』一・一・六)。その条文で彼は正しい信仰の定義を

提示したが、カルケドン公会議にも『トムス』にもいっさい言及はない。ユステイニアヌスは反カルケドン派を支持する皇妃テオドラに促されたのであろう、この後も再三にわたってセウエロスを招請した。五三二―五三五年の冬、<sup>(94)</sup>セウエロスはついにコンスタンティノポリスへ上った。反カルケドン主義者の大群を引き連れて、彼は数ある宮殿のうちのひとつに身を寄せることとなった。<sup>(95)</sup>

セウエロスの帝都到着の直後に、五三二年の「会談」に参加したカルケドン派の禁欲行者アンティモスが総司教となった。ここで皇妃テオドラが介入する。彼女は反カルケドン派の主張への共感から、セウエロスの影響力を新総司教推戴のために用いようとしたのである。新総司教は反カルケドン派陣営に与してセウエロスとアレクサンドリアのテオドシオスとの交わりに与るようになってからまだ日が浅かった。<sup>(96)</sup>しかし、反カルケドン派の優勢はそう長くは続かなかった。ユリアノス主義の党派によって五三五年五月二四日、<sup>(97)</sup>テオドシオスはアレクサンドリアから排撃されてコンスタンティノポリスへ向かい、五六六年に没するまで追放の身のまま帝都に住んだ。アンティモスはパレスティナとシリアの修道士たちからローマ総司教への告発を受け、

退任を強いられた。セウエロスは逃亡した。テオドラの庇護さえも、ユスティニアヌスと教皇アガペートウスの協力関係には対抗することができなかった。二人はこの提携関係を、カルケドン派の正統性の根拠として保っていたのである。五三六年五月から六月にかけてコンスタンティノポリスで行われた総本山における公会議で、アンティモスとセウエロスは断罪された。セウエロスは「上長の權威を認めぬ者（アケファリ）」として、正統主義の司教の權威を認めなかったかどで、エウテュケス主義者として、マニ教徒として告発された。<sup>(98)</sup> 教憲教規に基づかぬ洗礼を行ったかどで、教会法にそぐわぬ集会を行ったかどで、そして異教徒として告発された。公会議の決定は同年八月に帝国の勅令（『ノウエツラエ』四二）によって批准された。アンティモスとセウエロスとその支持者たちは市民権を剥奪された上で流罪を宣告され、セウエロスの著作は糾弾された。テオドラの手引きでセウエロスは再びエジプトに逃れ、<sup>(99)</sup> 砂漠の各地を転々とし、アレクサンドリアの南のケツリア、<sup>(100)</sup> スケートイス、セウエロスの名を冠した修道院のあるアッシュートの山岳地帯にも滞在した。彼はアレクサンドリアの東にあるコイス（サカ）の町で五三八年二月八日月曜日に死ん

だ。彼の遺骸は後にエナトンの黒曜石の修道院に移送された。<sup>(101)</sup> セウエロス崇敬はエジプトの修道院と知的中心地に広がった。ここで彼は奇跡を行う者としてではなく、もっとも偉大な単性論神学者として崇敬されている。シリアでも彼は特別な崇敬の対象となっている。その証拠に、彼の伝記を著したベイト・アプトニアのヨアンネスや、その他さまざまな著作家が、セウエロスを題材とする宗教的賛歌を書いている。

## 結語

五三六年の勅法によって、セウエロスの人格と著作とが断罪された結果、事実上、ギリシア語での彼の著作の継受は停止した。しかし、第二七講話のうちのニュッサのゲレゴリオスあるいはエルサレムのヘーシユキオスの名で伝えられる聖書注釈集や、彼の死後に書かれた論敵の著作、たとえば修道士エウスタティオスの著作<sup>(102)</sup> などのような著作に含まれる、例外的に残された多数のギリシア語断片によって、われわれはセウエロスの作品の実質的な体系を知ることができるとができる。彼の作品を知る上での主な媒体はシリア語伝

承であるが、コプト語でも多くの断片が伝承されており、シリア語やコプト語よりも少ないとはいへ、アラビア語やエチオピア語でも断片が伝承されている。

その人生と著作の概観からもわかるように、アンティオケイアのセウエロスは古代末期の五〇年間にわたって、聖職者としても、政治においても教会においても、さまざまな役割を演じて傑出した人物である。最初に彼は修道者の姿で現れ、ついで最初の神学的著作を著した地である帝都コンスタンティノポリスで活躍する神学上の圧力団体の指導者の姿で現れる。結果として、司祭の職務にあるときの彼は司牧者の姿で、州都アンティオケイア市と修道者への、そして都市の後背地の農村に住むキリスト教徒への熱心な説教者の姿で現れる。総司教としてのセウエロスは、やはり精力的にカルケドン公会議の議決に対する反対運動の政治的側面にかかわってゆく。追放の身にあるときにはいっそう精力的であり、東方の帝国政府には、教会の一致を獲得するためには不可欠の人材として認識された。教会と政治活動に際して、彼が一貫した態度に基づいて精力的に活動したのは、シリアとエジプトの非カルケドン主義教会の安寧を保つ責任を感じていたためと考えてよいであろう。

セウエロスの死後、シリアの教会はヤコボス・バラダイオスの努力によってさらに強固な組織を備えることとなる。ヤコブ派教会の名はこの人物の名にちなんでいる。

神学の点では、セウエロスは反カルケドン主義神学に科学的で構造的な連関を与えた革新的な思想家というよりもむしろ、防衛的な姿勢を貫いた思想家として位置づけられることができる。彼の思想はなにをにおいてもまず、アレクサンドリアのキュリオスの思想と、キュリロスが擬アポリナリオス文書から継承したキリストの唯一の本性にかんする用語法に多くを負っている。アンティオケイア総司教セウエロスはいわゆるネストリオスの両性論とエウテュケスの単性論を忌み嫌ったが、当時のキリスト教徒の大半はカルケドン主義への賛否を問わず、彼と同じようにそれらを嫌悪していた。それゆえ、セウエロスの議論には彼自身が認めざるをえないと覚悟した以上にネファリオスあるいはヨアンネス・グラマティコスとの共通点も多くみられるが、この二人が自らの議論とセウエロスの議論のあいだに厳密に共通する基盤を見いだそうと試みると、セウエロスは抵抗を示した。とはいへ、単一性の定式を柔軟な定式とする作業を通してセウエロスは神受難論（テオパスキスモス）

やキリスト非知性論やキリスト単意論の陥穽を退けることができたのであり、受肉の救済論的な意義をたゆまず強調すること、カルケドン主義者たちが描き出す静止した合一の構図以上に、キリストにおける合一の意義を力強く変化に富んだものとして効果的に理解させることを可能にしたのである。

### 註

- (一) 本文中における聖父の「*ὁ ἄνω*」の題は「*ὁ ἄνω*」° CPG = *Clavis Patrum Graecorum*, ed. M. Geerard; CSCO = *Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium*; Brière 1960 = M. Brière, *Les homélies cathédrales de Sévères d'Antioche*. Introduction générale à toutes les homélies, PO 29/1: 40-62, Paris 1960; Darling 1982 = R. Darling, *The Patriarchate of Severus of Antioch*, 512-518, PhD diss. Illinois 1982; de Halleux 1963 = A. de Halleux, *Philoxène de Mabhog. Sa vie, ses écrits, sa théologie*. Louvain 1963; Friend 1972 = W.H.C. Friend, *The Rise of the Monophysite Movement* Cambridge 1972; Grillmeier 1995 = A. Grillmeier, *Christ in Christian Tradition*, vol. 2, From the Council of Chalcedon (451) to Gregory the Great (590-604). Part Two. The Church of Constantinople in the Sixth Century (trans. P. Allen and J. Cawte), London-Louisville KY 1995; *HE = Historia Ecclesiastica*. Honigmann 1951 = E. Honigmann, *Évêques et évêchés monophysites d'Asie antérieure au VII<sup>e</sup> siècle* (Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium 127), Louvain 1951; JBA = *Vie de Sévère* by John Beith Aphthonia, ed. M. A. Kugener, *Patrologia Orientalis* 2, Paris 1907: 201-264; Lebon 1909 = J. Lebon, *Le monophysisme sévérien*, Louvain 1909; Moeller 1951 = C. Moeller, 'Le chalcédonisme et le néo-chalcédonisme en Orient de 451 à la fin du VII<sup>e</sup> siècle', in A. Grillmeier-H. Bacht (eds), *Das Konzil von Chalcedon. Geschichte und Gegenwart*, vol. 1, Würzburg 1951: 637-720; PO = *Patrologia Orientalis. Select Letters* = E.W. Brooks (ed. and trans.), *The Sixth Book of the Select Letters of Severus, Patriarch of Antioch, in the Syriac Version of Athanasius of Nisibis*. London 1902, repr. Farnborough, Hants. 1969 (text); London 1903, repr. Farnborough, Hants, 1969 (trans.); Torrance 1988 = I. R. Torrance, *Christology after Chalcedon. Severus of Antioch & Sergius the Monophysite*. Norwich, 1988; Torrance 2000 = I. R. Torrance, art. 'Severos von Antiochien', *Theologische Realenzyklopädie* 31, Berlin-New York 2000: 184-6; *Vie*

- = *Vie de Sévère by Zachariah Scholasticus*, ed. M. A. Kugener, *Patrologia Orientalis* 2, Paris 1907: 1-115.
- (2) *Vie* 11.
- (3) *Vie* 9, and 75.
- (4) *Vie* 10.
- (5) *Vie* 80-2.
- (6) PO 36/4: 563.
- (7) Darling 1982: 22-5.
- (8) *Vie* 92-3.
- (9) *Vie* 95.
- (10) *Vie* 95-6: JBA 229.
- (11) *Vie* 98-100; Honigmann 1951:132-3. この書は、  
ニホスベシニユナリナドモける強固な反カルケマン主義にか  
くちの証文である。
- (12) *Vie* 103-4.
- (13) W. H. C. Frend, 'Severus of Antioch and the mono-  
physite hierarchy', in D. Neiman-M. Schatkin (eds),  
*The Heritage of the Early Church. Essays in Honor of*  
*G. V. Florovsky* (Orientalia Christiana Analecta 195),  
Rome 1973: 265.
- (14) C. Moeller, 'Un représentant de la christologie néo-  
chalcédonienne au début du sixième siècle en Orient;  
Nephalus d'Alexandrie', *Revue d'Histoire Ecclesiastique*  
40 (1944-5): 105.
- (15) *Vie* 103-5.
- (16) シリア人ニカホル『年代記』九・八。
- (17) De Halleux 1963: 61.
- (18) De Halleux 1963: 76. フィロクセノスはセウエロスより  
も年長であり、シリア語話者である。アレクサンドリアより  
は、辺境ともういへばエデッサで学んだ可能性が大きい。
- (19) Moeller 1951: 670.
- (20) De Halleux 1963: 69.
- (21) De Halleux 1963: 65.
- (22) De Halleux 1963: 74.
- (23) Honigmann 1951: 15.
- (24) Lebon 1909: 120-1.
- (25) Grillmeier 1995: 49.
- (26) *Apologia Pulaethis*: CSCO 319: 114.26.
- (27) Moeller, 1951: 645.
- (28) *Ad Nephaium* I.1.
- (29) *Ad Nephaium* II:8: 26-8.
- (30) Grillmeier 1995: 22.
- (31) Grillmeier 1995: 23.
- (32) Grillmeier 1995: 23.
- (33) モンメス・トリス『年代記』一六。
- (34) 田代トリス『年代記』一六。 参列者の名  
はトリスHonigmann 1951: 15参照。
- (35) PO 38/2: 254-69.



- (96) PO 38/2: 261-2.  
 (97) トキトトキ 『聖七聖記』 AM 6004.  
 (98) HE III 34.  
 (99) Lebon 1909: 61-2.  
 (100) *Select Letters* I. 24: 84; cf. Friend 1972: 226.  
 (101) Darling 1982: 46.  
 (102) Letter XLVI, PO 12/1: 321.  
 (103) *Select Letters* I. 27: 88.  
 (104) De Halleux 1963: 81 n. 38.  
 (105) Letter LI, PO 12/1: 325-6.  
 (106) *Select Letters* I. 19: 68.  
 (107) De Halleux 1963: 87.  
 (108) Friend 1972: 228.  
 (109) *Select Letters* I. 3, 4, 12, 13, 19, 22, 38, II. 2.  
 (110) *Select Letters* I. 13: 62.  
 (111) *Select Letters* I. 29: 101.  
 (112) *Select Letters* I. 1: 10.  
 (113) *Select Letters* I. 43: VII. 4.  
 (114) *Select Letters* I. 40.  
 (115) De Halleux 1963: 86; Friend 1972: 226; Torrance 1988: 9-10, 13-14.  
 (116) Halleux 1963: 86; Friend 1972: 226; Torrance 1988: 9-10, 13-14.  
 (117) *Select Letters* V. 15: 353.
- (98) *Select Letters* I. 11, 43; IV. 5; VII. 1; VII. 3.  
 (99) *Select Letters* I. 29; V. 3; X. 6.  
 (100) P. Allen, 'Severus of Antioch and pastoral care', in P. Allen-W. Mayer-L. Cross (eds), *Prayer and Spirituality in the Early Church*, vol. 2, Brisbane 1999: 397-9.  
 (101) P. Escolan, *Monachisme et Église*.  
 (102) *Le monachisme syrien du IV<sup>e</sup> au VII<sup>e</sup> siècle* (Théologie historique 109), Paris 1999, passim.  
 (103) Torrance 1988: 7.  
 (104) Grillmeier 1995: 113.  
 (105) A. Olivari, *La predicación cristiana Antigua* (Biblioteca Herder. Sección de teología y filosofía vol. 189), Barcelona 1991: 403.  
 (106) Brière 1960: 50-62.  
 (107) Hom. I, XXXIII, XXX, LXII, CV, CXII.  
 (108) JBA 244-5.  
 (109) Honigmann 1951: 20.  
 (110) H. Bacht, 'Die Rolle des orientalischen Mönchtums in den kirchen-politischen Auseinandersetzungen um Chalcedon', in A. Grillmeier-H. Bacht (eds), *Das Konzil von Chalcedon. Geschichte und Gegenwart*, vol. 2, Würzburg 1954: 287.  
 (111) *Select Letters* VI. 1: 362.  
 (112) J. Maspero, *Histoire des patriarches d'Alexandrie* (518-



126-36 年頃。パトリクニ聖史家として知られる。Y. N. Youssef, 'Arabic manuscripts of the Philaletes of Severus of Antioch', *Proche-Orient Chrétienne* 51 (2001): 261-6 年頃。ハチケルニ聖史家として知られる。W. Witakowski, 'Severus of Antioch in Ethiopian tradition', in V. Böll, D. Nosnitsin, T. Rave, W. Smidt and E. Sokolinskaia (eds), *Studia Aethiopica. In Honour of Siegbert Uhlig on the Occasion of his 65th Birthday*, Wiesbaden 2004: 115-125 年頃。

(註) Torrance 2000: 186.

【補記】 パトリクニ聖史家として知られる。Pauline ALLEN 著 The Life and Thought of Heretic: the Case of Severus of Antioch の全訳。

## 《 討 論 》

監修・記録作成 出村和彦

加藤 信朗

カルケドン公会議のキリスト論をめぐる複雑な状況背景について、スリリングで本質を衝くご発表に深く感謝したい。本日はこの時代を専門とする学者ばかりでなく、そうではない研究者も参集しておられるが、双方から活発な質問が出るのが期待される。

宮本 久雄

専門的な話にはいる前に、本日のご発表で学んだカルケドン公会議当時の詳しい状況の話が、現代のわれわれとどのような関係があるのかお伺いしたい。一般にキリスト理

解において、それを人性の方に引き寄せる方向と神性の方に引き寄せる方向とがある。後者の理解だと、宗教的に多元的な現代においてすべての宗教が一つの神性のもとに協働できることにもなるが、しかしそうだとすると、歴史的なキリストのかけがえない受肉が相對化され、これを絶対視できなくなってしまう。他方、キリストの歴史的受肉や制度としての教会を絶対視すると、相変わらず統合とかそういうことができなくなってしまう。カルケドンのキリスト論争はどのような現代的アクチュアリティを持つのであろうか。

P・アレン

討論の口火を切ってくれて感謝する。キリストの神性あるいは人性のどちらかをより重視するか、より少なく見積もるかの論争に関わる問いである。カルケドン論争であれその他の論争においてであれ、いかなるキリスト論的定式といえども、どれか一つの理解だけで十分であったり完璧であったりするものではない。どちらのキリスト論的体系も受け容れうるものであり、事実教会はそれを真正な伝統として受け入れてきた。悲しいことにこの論争の過程で大

きな教会分裂が生じた。必要なのは、お互いに相手に対して無知のまま過ぎてきた現状を打開することである。そうは言ってもしかし、現代の研究の目的は、ただ一つの統合された教会をつくることにはない。取るべき道はどちらかというところと小さな一歩である。この百年、とりわけ西方の伝統でもまたビザンツの伝統でも、それぞれ自分たちには失われたものも多かったことに気づき始めた。たとえば、コプト教会の伝統は、これをただ単性論で異端的だとレツテルを貼るだけではすまされなくなっている。現教皇でさえ、これを「別れた教会の兄弟たち」と考えなければならなくなっている現実がある。これは小さな点とはいえ、重要なことであると私は考えている。

### 桑原 直己

私はローマン・カトリックの信徒であり、トミストの立場に与する研究者であるが、敢えて質問する。先生のご発表は、反カルケドン派のセウエロスに共感的で、結論において、カルケドン公会議のスタティックな決定に対置される彼のダイナミックな理解ということを支持されたように思えるが、それでは、カトリック大学の教授であられる先

生のお立場はいかなるものか。まさか、新カルケドン派ホノ或いは反カルケドン派というのではあるまい(笑)。

### P・アレン

もちろん。しかし、セウエロスには共感的であり、できるだけそのような態度で読もうとしている。かつて私がグレルマイヤーの協力者として仕事をしていたとき、セウエロスの祈りについての本に取り組む機会があった。毎日毎日あの擬古文のぞっとするような文体の文章を読み続けていて、何が彼をそうさせたのか考えさせられた。その中でカルケドン公会議のスタティックで厳格な規定文体との相違にも気づかされた。これらがどのように相互交渉していたのか。公会議のテーマはキリストの人性をめぐるものではあるが、これを解釈する者たちのそれぞれのグループが持っている霊的な理解の仕方について、歴史的な事実としても、またその背後の力学についても十分に顧慮する必要があるのであるとして研究を進めている。

### 加藤 信朗

ちなみにオーストラリアの研究集会に参加した際、ある

人から「あなたがローマン・カトリックだというのはおかしい。日本人カトリックジャパネーズと言うべきではないか」と言われたことがある(笑)。

柴田 有

セウエロスのメッセージが今日のオーストラリア教会にとって意味を持つとすれば、主としてどのようなことが考えられるか。

P・アレン

確かに、オーストラリアにはコプト教会の大きなコミュニティが存在している。教会論や説教には影響があると言える。ただ、オーストラリア全体についていえば、いろいろな娯楽に満ちた今日、教会に行く人は信徒の四分の一程度という数字もあるのが現状である。

加藤 信朗

相対主義と絶対主義の問題の解決はないが、しかし、メルボルンでコプト教会での主日典礼に参加したとき、そこでは教会分裂以前の典礼(ヨハネス・クリュソストモスの

典礼)が連綿と守られていた。私のオーストラリア体験に照らして、私たち日本人は実に西方化ウェスタンナイズ(西欧化)しているという事実に変更が気づかされた。

竹田 文彦

シリア語キリスト教を研究している立場から質問したい。一つは翻訳の問題。キリスト論で重要となるターム、たとえばウーシアがシリア語のクノーマに翻訳される際の微妙なテクニカルな問題について先生はどのようなアプローチをしているのか。また、今日の研究では、一口に「単性論」といっても様々なグループ分けが為されると思うが、論陣の中でセウエロスはどのようなグループに位置づけられ、そして、そこにはどのような影響や重要性があるのか。

P・アレン

そのグループとはどのような分類をお考えか。

竹田 文彦

ヘノフュサイト(単一性論)からモノフュジット(唯一性論)までその度合い・実体的に考えるか名目的に考える

かなどで七つくらいのグループ分けができると思うが。

#### P・アレン

まずセウエロスが、エウテュケスとは違うことは確かである。シリア語圏のフィロクセノスやサレルのヤコボスと同じで、ヘノフュサイトということになる。そこには何らかの影響関係はあろう。ただ、セウエロスは神学教育も受けているが、同時に知的かつ実務的な教育、ギリシア語の弁論術のトレーニングを法律学校で受けている。論陣の中で、シリア語を話すグループとギリシア語圏のグループとはメンタリティが少し違う点も出てきている。フィロクセノスなどはもっと激しい表現を取るが、セウエロスは修道士であったので比較的穏健である。

私はセウエロスの生涯の研究というアプローチを取っているが、セウエロスの翻訳に関しては、たとえばダーラム大学出身のR・ヘイウッド博士はシリア語文献についての神学的用語法も精査しており、スウェーデンのリトコフスキー博士はエチオピア語文献、私の同僚のヨアンナ・N・ユセフ博士はコプト語やアラビア語文献について研究を進めている。ゆっくりではあるが、多くの研究者が協力して

言語的な面からも研究するプロジェクトがある。

#### 荻野 弘之

カルケドンのキリスト論をめぐる包括的なご発表に感謝したい。その中で、彼の説教における「二つ」という語のことが問題になったかと思うが、この「二つ」ということに関して、救済論的・摂理論的な発展におけるセウエロスの位置をどう考えたらよいか。たとえば、カッパドキアンとのつながりはどうか。

#### P・アレン

「二つ」という語がカッパドキアン（カッパドキアの三教父）などによく用いられていたことを、セウエロスも認めているし、カッパドキアンは教父として尊重されていた。しかし、ネストリオスが登場して以来、この「二つ」という語はどんな形であれ、結合以前の理論的で抽象的な二つの本性について考察するとき以外には用いられないようになる傾向がある。結合以後の二つの本性とか二重の本性ということをセウエロスは語ろうとしないのである。文法家ヨアンネスは巧妙な人物で、カッパドキアンがこの「二つ」

という語を用いていることを熟知していて、セウエロスをこの共通の議論の土俵に連れ込もうとしたが、セウエロスはこれを拒否している。反カルケドン派には、ネストリオスを思い起こさせるいかなる概念に対しても激しい拒絶感<sup>パッサノイテ</sup>が働いていて、それが妥協をいっそう難しくしていたのである。

## N・マクリーン

まず遠いところからの質問になるが、私が専門として四世紀のアリウス論争との関係で考えてみると、そこには各陣営の団結というものがあり、アタナシオスのように司教座から速く追放されても指導者は自らの陣営になお影響力を与え続け、論争が続けられた。そこでの団結の原動力は何だったか。カルケドン論争では陣営内の団結はどうだったのか。古代教会には、真っ向から対立する論争がいくつかあるが、四世紀における実際のデイスカッションとカルケドン当時の論争とはずいぶん違うのではないか。なぜそう尋ねるかと言えば、カルケドンでは、双方満足する和解が可能であったかも知れないのに結局分裂してしまっただ。何が間違っていたのか。論者たちのパーソナリティの

問題なのか。ネストリオスに対する拒絶感がそうさせたのか。こういう中で両者の立場に共感的な、もっと柔軟な立場の可能性はなかったのか。それは少数派だったかもしれないが、そういう立場がもしあれば、教えていただければありがたい。

## P・アレン

二〇個以上もの質問を浴びたように全部に答えられるかどうか(笑)。まず、追放先からの影響力の行使の点について、その力の源泉は、広汎な広がりを持つ修道士たちが支持したことにある。反カルケドン派はこの修道士たちに基盤を持ち、特に砂漠地帯の修道士たちがそうだった。この点カルケドン派とは違う。ご質問は難しい問題を衝いているが、まず、六世紀になるまでに、エジプト的なエジプト教会、シリア的なシリア教会というようにそれぞれに地域民族教会<sup>ナシナル</sup>が隆盛してくる。これらはもちろんローマ帝国の一部分であり続け、カルケドン派であれ反カルケドン派であれ皇帝への忠誠は保っていたが、それぞれの文化的独自性に基づいて決定を行うようになる。和解は可能であったかという問題にも関わるが、そのような状況の中で、問



題は逆説的に困難を窮めた。ユスティニアヌス帝が目指したことはひとえに彼が望むような形の正統を打ち立てることだったからである。四世紀と六世紀の違いについて言えば、帝国権力のあり方、さらにローマと東方との関係の違いが出てきている点も挙げられよう。

#### 大森 正樹

一つ確認だが、文法家ヨアネスが最初に *en hypostaton* という表現を導入したとの指摘であったが、ビザンティオンのレオンティノスがこの表現を用いたことが知られている。両者の関係はどうか。

#### P・アレン

ビザンティオンのレオンティノスの方が後である。文法家のヨアネスの『カルケドン会議弁護論』はセウエロスに引用されているし、ギリシア語の断片がある。

#### 鈴木 順

セウエロスが追放されても修道士たちに支持され続けたことが顕著であるが、彼自身が修道士だったことが、彼の

理論や実践にどのような影響を与えたのか。

#### P・アレン

非常に良い質問であり感謝する。彼自身は修道士であると同時に法律家であるという複雑な人物である。カルケドン論争の靈性を考える際に、修道生活の背景を考えると大変重要である。セウエロスの論争的文書のみが取り上げられがちであるが、これを一般化してはならない。彼のテキストに広くあたれば、そこでの彼は、テオトコスに対してより深い崇敬の念があり、その救済論的な役割を強調している。また聖体礼儀ユキカリストの意義をより強調している。特に地域の宗教的共同体を守るために誰の手から聖体礼儀を受けるかを重要視している。これらの点からも、セウエロスにはカルケドン派の二性論のスタティックな理解とは異なる点が出てきている。ただし、彼に関しては、反カルケドン派を反駁する立場から通俗的および知識人向け文書が大量に書かれているので、注意が必要である。

#### 水落 健治

私は哲学者として古代後期の『ディアレクティカ弁証論について』を研

究している。ご発表では、カルケドン論争でのダイナミックな傾向とスタティックな傾向との対立が挙げられて、スタティックな文法家を論駁したとの言及があったが、その中のアリストテレス論理学の役割はどうだったのか。また、ダイナミックな面でのたとえばニュッサのグレゴリオスのエペクタシスという考え方とのつながりはどうか。

#### P・アレン

私は哲学者ではないので満足にお答えできるか分からな  
いが、二つの質問を一つにまとめてお答えしたい。セウエ  
ロス、彼を取り巻く新プラトン主義哲学のミリーユーの  
中で生きていた。そこには偽ディオニュシオスとの関係や  
とくに修道的に理解された新プラトン主義があったことは  
明らかである。彼は古いニカイア信条に基づくウーシアの  
完全なシノニミティ（同義性）ということを軸にしている。  
カルケドン以降、フュシスとウーシアの区別が出てくる。  
セウエロスは、この区別を問題を引き起こす元凶である  
として拒否している。彼のキリスト教は、新プラトン主義的  
なアレクサンドリアの哲学的伝統に連なるキリスト教であ  
った。セウエロスの用語法はカッパドキアンとはずいぶん違

ている。彼らが始めたウーシアとヒュポスタシスの区別も、  
ニカイアには無いものとして、セウエロスは避けようとし  
ている。

#### 加藤 信朗

私は哲学者として、フュシス、ヒュポスタシス、ウーシ  
アの区別に関心がある。これらがシノニム（同義）という  
のは、神性 *divinity* と人性 *humanity* の間にキリスト  
*Jesus Christ* を置いて、そのあり方を高度に思索してい  
る神学的あるいは修道者のなやり方の中でのことであろう。  
これが西方では *una persona duae naturae* となるわけ  
であるが、私は、何かその間に行く妥協の道を示したいと  
思う。というのは、このキリストの本性は福音で知られ、  
同時に人の言葉として、たとえば比喻で示される。これは  
俗的プロザックな立場からの道で容易な道とも言えるが、アウグスティ  
ヌスなどは重要視している。ではこれに対して、先の神学  
的修道者的アプローチではどうなるのか。これと関連して、  
神顕現というか主の変容の事実はただ三人の使徒のみに現  
れたが、ペンテコステの後は他の者にも直ぐ分かる形で伝  
えられるということがある。この位相の違いについて何か

お考えがあるか。

P・アレン

ご指摘はいわば低キリスト論の立場の提示だと思うが、カルケドン派も反カルケドン派もどちらもいわば高キリスト論者たちである。先生のご指摘には東方と西方の違いの問題も横たわっている。東方にとっては *una persona duae naturae* というのは全くのナンセンスと受けとめられるであろう。それぞれに何が固有の問題であったのかを見極める必要がある。

宮本 久雄

セウエロスの聖霊論はどのようなものか。というのは、ご発表でのセウエロスのキリスト像は、われわれ皆にも開かれているような姿をとっているのです、そこには聖霊の役割も考えられているのではないか、と思った次第である。

P・アレン

セウエロスにおいて聖霊についての論述はまれである。彼はキリスト論、教会論、救済論に中心をおいている。

久山 道彦

これまで「異端者」として片づけられていたものを、当時の文書や書簡を用いて、そのいろいろな面を示してください。ご発表に感謝したい。質問は三つ。一、女性への言及はいかに。二、ユダヤ人たちとの関係はどうだったか。三、オリゲネスをどう読んでいたか。

P・アレン

三つのご質問に感謝する。まず、彼には女性宛のたくさんの書簡がある。その中に『ある高貴な夫人への手紙』があり、ここではカルケドン派の聖体礼儀に与かってよいかという質問に答えてあげている。この女性はいかに知知的で教養のある人物で、カッパドキアンやヨアンネス・クリュソストモス、キュリロスにも言及しつつ聖書の意味についてセウエロスに非常に鋭い質問も寄せている。パトロンの一人だったかも知れない。またセウエロスは、ゲオルギアと呼ばれる女性に対して、両親に代わる保護者として、事細かな司牧的な指示を与えているし、『説教』にも女性への言及はある。また、セウエロスのユダヤ教との関係について論じるのはたいへん難しい。まず留意しなければなら

ないのは、セウエロスの著作の中でユダヤ人に言及がある場合でも、それは歴史的に同時代に実在するユダヤ人たちについてではなく、文学的の粹の中の言説である点である。最後に、オリゲネスについてであるが、セウエロスはオリゲネスを引用はしていない。当時すでにオリゲネスに対する悪評は定着していたからである。しかし、聖書解釈法そのものは両者ともよく似ている。

堀江 聡

新プラトン主義を研究する者として質問したい。ポルフュリオスとキュリロスは関係があったようだが、五世紀六世紀のキリスト教と新プラトン主義哲学との関係について、何か教えていただけるか。たとえば、この時期ディオニュシオスの真正性は確立していなかったと思われるが、セウエロスと偽ディオニュシオスとの関係はどうなっているのか。

P・アレン

偽ディオニュシオスについては、五三二年にコンスタンティノポリスで、カルケドン派と反カルケドン派の間で初めて問題にされる。しかしディオニュシオスは真正のディ

オニュシオスとして扱われていた。セウエロスは偽ディオニュシオスの有名な句を引用している。この文言はシリアの修道運動サークルと哲学サークルという、同じサークルから伝えられた。彼らによって偽ディオニュシオスは教義的というよりも靈的に解釈され、カルケドン派に対する反駁の典拠にされたようである。なお、セウエロスはアレクサンドリアで哲学も勉強した。それを異教徒から学んだのであったが、誰について学んだかは明らかではない。どうか明らかにしていただきたい(笑)。

加藤 信朗

他に質問はありますか。それでは。アレン先生、本日は本当にどうもありがとうございました。

第一〇四回教父研究会

(二〇〇三年三月一五日 於聖心女子大学)

司会者 加藤信朗 (東京都立大学名誉教授)

発表者 ポーリー・アレン (オーストラリア・カトリック大学)

ク大学)

発言 宮本久雄 (東京大学大学院)

桑原直己（筑波大学）

柴田 有（明治学院大学）

竹田文彦（英知大学）

荻野弘之（上智大学）

ニール・マクリーン（慶応大学）

大森正樹（南山大学）

鈴木 順（東京大学大学院博士課程）

水落健治（明治学院大学）

久山道彦（明治学院大学）

堀江 聡（慶応大学）

討論部監修 出村和彦（岡山大学）

論文翻訳 中西恭子（明治学院大学）